

九州電力	発電用水	松永川小野	6.2	75	3.0	10.2	3.2	180	0.01	7.8
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
30. 3.14	広森福盛	工業用水	谷山町		2.2	6.3	10.6	112		
30. 3.16	桐原十次郎	醸造用水	川内市	6.6	4.7	0.05				

3.2.12 題目 川内石灰石鉱床調査報告

野元堅一郎 木脇祐之

〔目的〕

川内市営石灰工場よりの依頼で石灰石鉱床の実態を把握する目的で昭和30年4月25日～28日にわたって調査した。

〔概要〕

I 沿革

天保年間川内川堤防工事が高江方面に来た天草の石工よりその利用価値を教へられ、明治初年土地の人等が石灰焼を初め、主として水田用、漆喰用として供給した。明治35年36年頃最盛で一時は60窯以上も操業したが、明治43年水田に石灰を施用する事を禁じられたので次第に衰微した、その大正初年解禁され窯も再開し、昭和16年より24年まで稲荷田稲助、平山重人等により稼行された後全年10月水引村に買収、村営となり26年4月水引村の川内市への合併にともない川内市石灰工業所として現在に到っている。

II、位置 交通

事務所及び窯は川内市より川内川右岸に沿って京泊に致る県道上市より西西北12Km又川内川河口を遡ること

2Km余の県道脇にあり河岸に接す、採掘場は月屋山（164m）の東麓にある。市内より京泊間は一日四往復の南国バスが運行し又東北6Kmには鹿兒島本線草道駅があり県道を通じ、川内川は舟楫の便もある。

III、地質、鉱床

鉱区附近は古生代の珪岩、粘板岩、砂岩、及び石灰岩と第三紀の火山岩（角内安山岩、石英安山岩）及び部分的に第三紀最新のものと思はれる稍軟質の砂岩、頁岩から構成されている。

石灰岩は前記珪岩中に挟在し、走向は大略N20°W傾斜はW60～70。を示す。最も巾の広い所は250mに及ぶが中央部より南及北に向うに従つて狭少となるその延長は約950mを追及する事が出来る。石灰岩の上下層際には断層角礫層を見る。

IV 品質

現在稼行中の石灰石は一般に外觀灰白色ないし暗灰色で時に暗黒色を呈し、非晶質ないしわずかに微晶質で緻密堅硬、品位良好で均質性に富む。本鉱床に見られる傾向として南下するに従つて灰白色ないし白色で稍脆い方解石質のものを増し北上するに従つて黒味を増し堅緻となる。

次表に採取試料の分析結果を示す。

No	TgIOSS	CaO	MgO	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	P ₂ O ₅	SO ₃	外 観
1	% 43.41	% 55.47	% 0.38	% 0.24	% 0.16	% 0.22	% 0.031	% 0.052	灰色微晶質
2	43.36	54.71	0.34	0.51	0.05	0.20	0.028	0.044	全 上
3	43.90	54.83	0.41	0.80	0.10	0.30	0.032	0.060	微桃黄灰色の方 解石質
4	42.90	53.39	0.44	1.76	0.88	0.48	—	—	灰黄色、方解石質 、黄色粘土汚染
5	43.35	54.25	0.38	0.45	0.24	0.51	0.014	0.071	灰色微晶質
6	43.20	54.90	0.46	0.45	0.38	0.40	—	—	全 上
7	43.52	55.63	0.34	0.13	0.12	0.23	—	—	暗 灰色、非晶質
8	43.50	55.44	0.42	0.26	0.18	0.24	0.024	0.063	全 上
9	43.53	54.49	0.55	0.87	0.46	0.16	0.027	0.058	全 上
10	45.30	51.22	0.54	2.01	0.55	0.36	0.057	0.056	暗 黒色 非晶質
11	43.31	53.77	0.57	0.90	0.88	0.35	—	—	全 上
12	43.38	54.10	0.49	1.00	0.72	0.33	0.059	0.070	全 上
13	45.46	51.06	0.60	2.30	0.83	0.56	—	—	灰 黒 色 粘土汚染

V 鉱 量

鉱量を推定するに当つて鉱区中央を南北に走る谷より東部一帯をA鉱体とし、谷より西で丸岡峠より南部をB鉱体以北をC鉱体と三大別して、各鉱体別に数ヶ所の断面面積を鉱床状態を参照して推算し平均断面面積を算出し、各露頭延長を乗じ且つ鉱石の比重を2.5とし又採掘跡の状態より見て安全可採率を70%とした推定鉱量は次の様になる。

	平均 断面面積	延長	体 積	比重	推 定 予 想 埋 蔵 量 可 採 量	
	m ₂	m	m ₃		万トン	万トン
A 鉱 体	3.667	380	1,393.460	2.5	348	244
B 鉱 体	5.682	250	1,420.500	2.5	355	248
C 鉱 体	4.320	250	10,890.000	2.5	270	189
計					973	681

のうち既採掘量を約30万トンと推定して除外すれば約650万トンとなる。

VI 稼 行 状 況

現在当鉱区は鉱業権者川内市、面積2203アール探第553号として登録され、川内市石灰工業所として所長東保氏の下に事務員5、現場監督1、採鉱5、採石小割り8、運搬6、焼成3、消化包装8、雑役6、自動車運転士1、で採石から焼成製品包装まで操業している。採鉱は表土を取除き手掘発破法によつて採石し、小割り選鉱の上、0.5トン木製鉱車にて450mを運びシュートによつ

て窯場へ下す。焼成窯は徳利窯三基を設け近く更に二基の増設を準備中である。主たる販売先は生石灰を中越バルブ川内工場に、消石灰を三井金属串木野鉱業所に、其の他水田中和用及工業用として県内各地に供給している原石の需要は少いが、焼成に耐へない小礫を道路補装用として販売する予定である。昭和29年度の主な製品は次の通りである。

種 別	生 石 灰	工 業 灰	消 石 灰	原 石
数 量	15.859	10.937	365.603	トン 43

尙昭和30年度は製品（生石灰として）約5000トンを目標として稼行中である。

VII 結 び

叙上の様に品質良好で埋蔵量も相当期待出来る。将来販路の拡張を見れば現採掘場を南と北とに階段的に押し進めると共に、鉱区の南方人家附近より新に採掘を始め、次いでB鉱体の採掘を併せて行ふべきであると考へる。

〔収めた成果〕

川内石灰石鉱床の鉱量品質につき一応の規模を把握し共に有望である事を明にした。

〔業界に与へた影響〕

本調査の結果川内石灰工業所は将来の増産計画を立て大量需要者たる中越バルブ工場との契約を有利ならしめると共に水田中和用として多量に当県内に流入する他県産品への対策を立てる事が出来た。